月光太子

(1)

チャンドラブラブハ太子は、病気の王さまに　かわって、国をおさめていた。
月のように、きれいな顔をしていた。
月のように、心も　うつくしく、すみきっていた。
民が、しあわせに　くらして　くれることだけを、ねがっていた。
しょっちゅう、あちこちへ　でかけて、民のようすを　みてまわった。

(2)

あるとき、市をあるいていると、道ばたにいた　ひとりの病人が、太子に　すがりついて、うったえた。
みると、からだじゅうが、あちこち　くさって、今にも　いきがたえそうに、くるしそうだった。

「つらくて　死にそうです。なんとかして、おたすけください。」
太子は　おどろいて、その病人を、やさしく　なぐさめると、すぐ 城にかけもどって、国中の医者を 集めて、
「なんとかして、あの病人の 命を、たすけてやってくれ。」
と、たのんだ。
医者たちは、ねっしんに　そうだんした。
だが、医者たちは、もうしわけなさそうに、こたえた。
「あの病気を　なおすくすりは、わたしたちの手で、つくることは、できません。」
「どうしても　だめか。」
太子は、かなしそうに、念をおした。

(3)

としとった医者が、こたえた。
「たったひとつだけあります。」
「えっ！　それは　どんなくすりだ。」
「病人の　悪い血を　とって、生れてから　このかた、いっぺんも　おこったことのない人の血を　とって、いれかえることです。」
太子は、よろこんで、国中に　ふれをだして、そんな人を　もとめた。
だが、ひとりも　もうしでがない。
「あたりまえだ。」
と、太子は、ひとりごとを　いった。

「よし、おこったことのない人がいても、血をあたえることは、自分の命をなくすることだものな。」
そのとき、太子の心に、
「わたしは、民のひとりの命をも　そまつにしてはならない。さいわいに、わたしは、おこったことがないから、わたしの血を　あげることにしよう。」
と、いう考えが、ひらめいた。
それで、医者に　いうと、「とんでもない。相手は、どうせ死ぬ病人です。とおとい　太子の血など、いれかえられません。」　と、いって、だれひとり、いうことをきかない。
そこで　太子は、あたまの悪い　ならずものの　おやかた（親方）に、お金をあたえ、ひとりの医者を、
「殺すぞ。」
と、おどかせて、自分の血を、くるしんでいる病人に　うつす仕事を、させることにした。

（4）
あたらしい、生き生　きとした　太子の血が、病人に　うつされるに　したがって、みるみるうちに、病人は元気づいてきた。
それに　反して、血をあたえる、月のように　うつくしい顔をした、チャンドラブラブハ太子は、だんだんとその顔が　あおざめ、元気がなくなって　いった。
そのまま、ほおっておいても　いいのか。
ほおっておけば、月のように　うつくしい心の太子は、死んで　しまうではないか。

（5）
やきもきせずに、すべてを　ほとけさまに、おまかせしよう。
なもあみだぶつ。

（大智度論）

仏典童話「ヒマラヤのはと」花岡大学　著　より

年　　組　番　名前（　　）

月光太子

1)　⑴　⑵ を読んで下さい。

2)　どんなことが書いてありましたか。簡単にまとめてください。

3)　⑶ を読んで下さい。

4)　（3）には、どうしたら、病人を治すことが出来ると、医者は、言いましたか。

5)　⑷　⑸ を読んで下さい。

6)　（4）には、どんなことが書いてありましたか。簡単にまとめてください。

7)　太子のこのような行為を君は、どう思いますか。

8)　⑸ の意味を考えてみます。太子は、この後、どうなるのでしょうか。この続きを考えて、君自身で、物語をしめくくってください。

✍　更に考えてみましょう。

9)　⑶ に「相手は、どうせ死ぬ病人です」と書いてありますが、君は、今、この病気にかかっていませんか。

10) 太子とは、一体、誰のことでしょうか。

年　　組　　番　　名前（　　）